

生涯にわたる教育を考えると、社会教育の使命

開倫塾

塾長 林 明夫

おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただきましてありがとうございます。2月14日に、栃木県総合文化センターの特別会議室で、栃木県社会教育委員会の会議がありました。栃木県社会教育をどのようにするかについて、平間教育長はじめ社会教育委員会の方々が会議を行い、私も参加しました。これからの家庭教育の支援のあり方を、社会教育の行政の視点から考えるという提言書を、教育長に提出しました。この提言書でお願いした内容は、以下のようなことです。

栃木県には、子育て環境日本一という指針があります。そこで、子育て環境日本一になるためにはどうしたらよいかの原点にかえて議論をし尽くし、その上で、しくみづくりをしたらよいのではないかという提言です。家庭教育支援のための社会教育行政の対象は、高校卒業までが普通です。しかし、私は、家庭の中にはいろいろな方がいますから、できれば生涯にわたる教育、英語では Life Long Learning と言うこの生涯にわたる教育を考えると、社会教育の使命だと考えます。そこで、次の5点について教育長に提案しました。

1つは、成人の県民すべてにリーセント・ワーク(リーセントとは、適正な人間の尊厳を守るという意味)、つまり適正な人間の尊厳が守られる仕事を与えるためにはどうしたらよいかを考えること。具体的には、生活できるだけの収入を得て自己実現できる仕事が、リーセント・ワークであると思います。ニートやフリーターばかりでは、家計を維持することができず、家庭崩壊の原因にも繋がります。また、人口減少の社会においては、性別や年齢にかかわらず働ける人が皆働かなければ社会が維持できません。ですから、家庭教育の対象を、家庭で生活するすべての人に拡大し、成人県民すべてが生活できるだけの収入を得、自己実現できるリーセント・ワークを確保できる教育プログラムを、家庭教育支援政策として栃木県社会教育行政の中にも含めることを提案しました。

ところで、障害者を持つ家族はとても大変な思いをしています。そこで、2つ目は、この方々に対して生涯にわたる支援強化のしくみをつくったらどうかということです。障害者を持つ家族には、学生の時だけではなく生涯にわたる支援が欠かせません。ですから、家庭教育の支援を、生涯にわたるものに拡大することを提案しました。

3つ目は、栃木県の国際化の推進のために、外国から日本へ移住した方々とその子供たちへの家庭教育の支援強化とそのしくみづくりを提案しました。先日、滋賀県で痛ましい事件が起きました。

もしかしたら、その原因の1つに、日本語を外国語として習得するしくみが日本にはなかったことがあげられるかもしれません。日本のことを理解する上で一番大事なことは、日本語を理解することです。この習得が不完全だったために起きた事件かもしれませんので、事件の原因となる背景を追求し、それを少しでもなくすことが、遺族に対する社会的義務だと思います。

日本語の習得レベルには3段階あります。生活できるだけの日本語の習得が、生活日本語。学校での教育が可能な習得、これが学習日本語。もう1つは、高校入試などの試験が受けられるまでの習得、これを受験日本語と言います。このように、生活ができ、学校での教育が受けられ、高校受験もできるような日本語の習得が可能になって初めて、外国人にとって住みやすい栃木県になると思います。ですから、すべての学校に、外国人に対する日本語教育の専門教師を1人以上配置することを提案しました。そのための日本語教師養成を行う日本語教師研修センターを、栃木県の先生の教育機関である栃木県総合教育センターの中に設立することも提案しました。

生活習慣病、介護保険、高齢者医療のための費用負担は、国家財政や地方財政を圧迫して破綻の原因となります。そこで、4つ目として、いつまでも若々しく生きるためにはどうしたらよいかと考え、成人、とりわけ中年から熟年者に対する健康を維持するための教育を、社会教育としてはどうかという提案をしました。

5つ目は、栃木県としての高等教育政策についてです。大学、短大、専門学校などへ進学する人は大変多いですから、栃木県としてはどのようにするかの考えを明かにすべきであるという提案をしました。

今日は、栃木県社会教育委員会の会議での発言内容をお話させていただきました。皆さんも、家庭教育についてぜひお考え下さい。